特100
545

大僧正本多日生師講

義は山嶽よりも重し

274
537

始

特100
545.

義は山嶽よりも重し

（旭川下士全體の爲に）

本日は下士の方を中心として御話をするのであります。自分は軍隊の事に就ては一向暗いものであるが、承はる所によれば下士は兵卒を教育せらるゝ上に、時としては將校よりも直接の關係と影響とがあるとの事である。故に下士諸君は自分自身として充分の精神鍛錬を要するのみならず、又一方教官として部下を教育する上にも心掛が必要であると思ふ。故に諸君は兵卒の代表とし

2. 11. 27
内交

て、自分自身の精神修養だけでなく、同時に諸君が教育せらるべき人にも代つて御聞き取りの事を希望するのであります。

大體の事は先日來各部隊に於て御話致しましたが、然し軍人精神に就て種々な事のある中で、最も大切なる事は生命を君國に捧ぐることであり、此の事を眞に覺悟する事である。軍人の魂となれる御勅諭に

只一途に己が本分の忠節を守り、義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ

と示されて居る。己が本分の忠節を守りて、世間の政治上の議論とか、文學上のつまらない小説に心を奪はれてはならない。軍人は忠節を盡すを本分とし、而して死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよと仰せられて居るのであります。軍人精神には他にも色々大切なことがありますが、此の死は鴻毛よりも輕しとの覺悟が本當に出來て居らねば、健全なる軍人と稱することが出來ない。此のことが本當に鍛ひ揚げられて、そこから軍人精神の幾多の美點が發揮せらるゝのである。又軍隊内務書の中に

營内の生活は茲に大なる一家庭をなし、融々和樂の間に於て全隊の一致團結を鞏固にし、士氣旺盛にて軍務に勤勞し、上下相愛し、緩救相救ひ、有事の日欣然として起ち、國事に斃るゝを樂むに至るべし。是れ實に日本帝國軍隊の本領にしてとある。此の中で營内を家庭の如く愉快にする事も、一致團結と云ふことも、士氣旺盛と云ふことも、又緩急相救ふと云ふ事も、何れも尊い事柄でありまするが、一番大切な事柄は有事の日欣然として國事に斃るゝを樂むに至るのが、帝國軍人の本領であると

示されて居るのであります。自分は軍隊のことは不案内でありまするが、然しこの事柄は普通の家庭に就て考へても解ることである。欣然として樂むとは生命を惜む樣な事では、健全なる軍隊と稱することが出來ない。又野外要務令に實敵及び危險悲慘は竟に平時に示す能はず。然れども戰時之に耐へ克つの道は則ち有り。義務を守りて死生を顧みず、一身を犧牲にして君國の爲に盡す是なり。之を要するに軍の眞價は一に軍人精神にあり。軍人精神とは何ぞ。大和魂なり。

武士道なり。此の精神を鼓勵して責を重んじ、任を竭し、斃れて而して後に止む。是を軍人の本分とす。

平素どれ程本當に演習をやつても、どれ程熱心に訓練をやつても實際戰爭の時に敵軍と遭遇し、血流れ肉飛ぶ悲慘なる光景を、實際に示して平素に教練することは出來ない。故に眞の訓練は出來にくいが、然し唯一つの道がある。即ち道義の精神を鍛ひ上げて死生を顧みず君國に報ふるの心を本當に起さしめ、斃れて而して後に止むの決心、即ち死と云ふこと、自己の生命は君國に捧げし

ものなりと云ふことが本當に解つて、其の通りの心になつて居れば、夫れが所謂覺悟と云ふことである。其の覺悟を充分に與へて置くことが平素の訓練をして實戰と同一の力あらしむるの方法なりとせられて居るのである。

そこで此の軍人の本分を全うするには宗教と大なる關係が起るのである。宗教は死を恐れぬと云ふことを平素に説くので、眞の宗教は死生の間に處して泰然自若たるが本領であり、又軍人精神に於ても斃れて而して後に止むの覺悟が本分である。そこで軍隊

と宗教とは表面は異つて居る樣であるが、極所に至ると一致して居るのであります。而して命が惜くないと云ふことを鍛ひ上ぐるには、佛教には七千餘卷の經典がある。眞に此の經典を研究するならば、死生の間に安心を得る事は整ふて居ると稱して宜しい、宗教家は腐敗しても教は存して居る、眞の研究者に對しては其の光に變りは無いのである。教を建てし佛の眞精神を立派に説くならば、而して諸君が立派な人であるならば、充分に教の目的を達し得ると考へる。例へば熟練した老船頭が病に罹つて臥床して居る。大雨の後で水量の增した時に是非渡船を出さねばならぬことが起つた。村の青年が代つて漕ぐ事となつたが、川に慣れないから船が將に顚覆せんとして居る。其の時に病める老船頭が病床の中から大聲を發して色々注意を與へた。村の青年が、汝は病氣であつて自分一人をすら扱ひ兼ねて居るくせに、渡船の注意をするとは間違つて居ると云ふので、勝手に船を漕ぐならば、遂に破船するであらう。然し老船頭の經驗ある注意を信じて、剛健なる青年が之を活用すれば、幾多の危險に打克ち得るのである。宗教の

教と宗教家との關係は斯の如くであり、而して眞の宗教に於て論せられて居る死生の覺悟に關する教訓は積んで山の如くであります。

吉田松陰先生が彼の有名なる萩の松下村塾に掲げました士規七則の中に、

死而後己の四字は言簡にして意廣し

とありますが、眞に精神鍛錬をやつて確乎たる武士の魂を鍛ひ上ぐるには、死而後己の四字より外に方法がないと云つてある。

恐らくは士規七則の精神が傳はつて今日の野外要務令となり、軍隊内務書となつた事と想像します。死而後己とは論語に曾子の云つて居る事であつて、人が本當に道德をやるには生命を堵して之に當らねばならない。又佛教に於ても不惜身命と云ふ事があり、道德の問題では命を捨つる決心が一番大切である。又

我不レ愛二身命一、但惜二無上道一、

佛教の教とは生命を惜まずして、眞の道を愛することが教の眞髄極處である。又信仰に就ても捨身と云ふことを云ふ。佛教の教ふ

る所は生命を捨て、悔ひざるの覺悟であり、又孔孟聖賢の道に於ても死而後已がその極處となつて居る。

そこで松下松塾に弟子入に來るものがあると、松陰先生は直ぐ短刀を取り出し、九寸五分を新入生の前に差付け、『よし、弟子にしてやる。然しそれには松下村塾の規則がある、例令萬卷の書を讀んでも命を惜む樣では何にもならない。又孟子には生を捨て、義を取ると書いてあるが、見臺を叩いて大きな聲で捨生取義と喋舌つて居つても駄目である。生を捨て義を取るの覺悟は短刀一つあれば直ぐ出來ることである。面倒臭い理屈を學ぶよりは今日唯今腹を切れ。如何なる事があつても切つてしまへ。切腹すれば大學者である。短刀で切腹せよ。』何と云つても先生嚴然として聽きません。到頭理屈で云ひ詰められて、仕方なしに切腹せんと致しますると、先生は劍道の達人でありましたから、眞と僞とを見分けて、愈々の危機一髮の所で、短刀を奪い取つて、『よし、入門許す』と、始めて塾生となる事が出來るのであります。之が即ち松下村塾の特色となつて、長州からは段々豪い人が輩出したので

ある。軍隊に於てもやはり其の格式で、今日入營と云ふ日に一々腹を切る覺悟をさせるのが本式でありませうけれども、人數が多いから略式を用ひ、御勅諭奉讀の時に死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよと云ひ聞かされるのである。軍隊のみならず學校に於ても一旦緩急あれば義勇公に奉じと仰せられて居りまするから、やはり此の覺悟は鍛ひ上げてあるべき筈である。ところが中々夫れが出來て居らないために、汚名を受くる事となるのであります。そこで軍隊に於ては毎日死ぬ稽古をやつて居るのである。形式ばかりの演習は全く價値なきものであり、而も實戰の光景を示す能はざる故に、斃れて而して後己ひの覺悟を本格に打ち込む事となつて居る。

或は諸君はそう云ふ事は既に充分出來て居ると思はれるかも知れんが、中々そうは行かない。昔唐の大宗皇帝の時に、大變政治がよく行はれて米が一斗三錢位になつた。故に人が國内を旅行するに路金を要しなかつた。一斗三錢とすれば一升三厘、三合食つても僅かに一厘に過ぎないから、宿料を拂はずして何處にでも宿

めて呉れたのである。之は實際の事であります。かゝる善政を行つた豪い人である。又若い時に戰爭によつて天下を平定した人であるから戰も中々うまい。當時は弓を以て戰爭をしましたから、太宗皇帝も弓を愛しました。そこで國内から數百挺の弓を獻上した。其の中から十數挺を撰んで之を名弓と稱し誇りとして居た。或時弓造りの名人が參りましたから、太宗皇帝は自ら其の名弓を示された。名人は熟視して居つたが、『理由は後で説明致しますが、此の弓は眞の名弓でありません。』次の弓も、其の次の弓も、

十數挺悉くを否認してしまつた。太宗皇帝は驚き且つ少しく怒りまして其の理由を尋ねられた。名人は一々の弓に就て仔細に其の缺點を指摘した。理由頗る明晰でありましたから、太宗皇帝は成程と感心せられた。直ちに群臣を集めて『弓は目で見るもの故其の缺點は發見し易さに、尙ほ眞の名人にかゝれば斯の如き思はざるの缺點がある。政治の事は之に比較すれば容易に解り難い事であり、善政を施せりと考へて居つても、或は幾多の見落しがあるかも知れない。今此の弓作りの話によつて汝等は一層德政に心

を用ひよ』と申されたとの事が貞觀政要と云ふ書物にあります。諸君も亦數百挺の中から撰拔された名弓でありませうが、一々取り出せば少し位は憶病であるとか、粗暴であるとか、堅忍不拔の情神に缺けて居るとか、忠節信義の心が欠けて居る等の缺點があるかも知れない。或は十數挺悉く名弓でないかも知れない。故に本當に精神を鍛ひ上げねばなりません。何處迄も義は山嶽よりも重しと云ふ事を衷心から考へねばなりません。何故に義は山嶽より重いのであるか。此の事がよく心の中にこなれて居りまする

か、どうです。いや〳〵乍ら覺悟して居るとか、服從せねばならぬからすると云ふ樣なことでは、欣然として國事に斃るゝと云ふ事にはならない。

義とは日本國民道德の大本である。軍人に限らず日本人の生命は義の一字であります。先日或る軍隊へ參りましたら、將校の話に、兵士に忠義と云ふことに就て質問した所が『軍人になつたから、そこで忠義を盡さねばならぬと思ひます』『然らば軍人にならなかつたならば、忠義を盡さずともよろしいのか』『マアそうであ

ります。』と答へたと云ふことでありますが、軍人になつた故に義は山嶽よりも重しと覺悟するのでない、日本人たる以上は、宗教家でも、教育家でも、百姓町人でも、皆義勇奉公の精神を持つべきである。一旦緩急あれば義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼すべしと云ふ事は、一般國民の上に奉戴すべき國民道德の生命であります。

何故に然るかと申しますると、人の一切の善一切の德の中で、忠義と云ふ事が一番立派なことであります。世の中には色々善い事がある、政治家が國家を經論するのも、教育家が子弟を訓育するのも、宗教家が心靈界の救濟に從事し、社會事業を行ふ等は皆善いことであります。人の善と稱し、德と稱す可きことは澤山にあります。又會を作つて多數の人が團結し、五百人千人の集團の力を以て善いことを行ふのも結構なことであります。然し之等は皆小さなことであり、國家の結合を擁護し、國家に盡すと云ふことは、之等凡ての善なり德なりの中で一番尊い意義を有するのである。政事も宗教も教育も悉く國家の權威の下に保護せられ居

るのであり、若し國家の結合が破壞されれば之等一切は直ちに亡び去るのである。故に國家は一切の道德善行功德中で最高に位して居る。人は國家を通さざればろくな善行功德を積むことは出來ない。國家は諸德を包含し、之を統一せる最高の善である。私利私慾に囚はれて一身の榮を計るは大丈夫のことにあらず、男子生れて軍人となり、直接に國家を擁護する任務に當るは面目之に過ぎたるは無し。國家は一切の道德を包含せる最高善であり、斯る國家の干城となり、斯る國家に盡すとは、一切の善行美德を包含して擁護するのである。そこに義は山嶽よりも重しとの意義が生じて來るのであります。

又國家の結合の中に五千萬七千萬の國民の幸福が保護さるゝのである。例へば國家は船の如く、國民は乘船者の如くであつて、若し船が破壞されれば乘船者は悉く溺死すると同樣に、國民の幸福安寧は國家によつて保護されて居るのである。進んでは廣く人類の救濟も、世界文明の完成も、日本の國家によつて保全さるゝのである。日本の國家あるによつて東洋の文明が維持せられ、

東洋あるによつて西洋の方も稗益する所が頗る多い譯である。西洋にも長所があるが、然し西洋に無き立派な文明が日本にある。西洋人は西洋文明によらざれば世界の人類は救濟出來ないと考へて居るのであらうが、それは偏狹なる考である。日本は東西の文明を融合して遂に世界を救濟するものであり、日本は實に斯る天職を有して居る。日本がなくなれば困るのは日本人ばかりでない。世界の文明を完成すべき終極の實行者が消滅することゝなるのである。斯る自信力を有するのが日本國民であります。

更に進んで論ずれば單に世界計りでない。天祐は日本に下つて居る。天は私しない。日露戰爭に勝つたのは勝つべき正義が存して居るからである。此の次ぎ他の國と戰つても日本は屹度勝つ、天祐は永久に我國に下つて居るのである。此の信念を有するのが日本人であり、此の堂々たる精神によりて天業を翼賛するが日本人であります。

斯る天の精神天の事業も、又世界の文明人類の幸福も、日本によつて保全せられ、其の中に於て哲學も宗教も文學も一切の文明

を擁護して行く。これ等の凡てが義の一つで擁護さるゝのであります。一人二人の生命は此の大なる義に比較すれば何でもない。死は鴻毛よりも輕しと云ふ事は茲に領解せらるゝのである。若し諸君が國家を擁護しないならば、國内の日本人だけに對しても如何なる影響が及ぶか。進んで世界に對し、天の精神に對して其の影響如何。義といふことによつて人類全體の幸福が保障せらるとせば、國家は家に譬ふれば大黒柱である。之を保護するためには窓の桟一本位は傷けても何でもない。個人一人の命を犠牲として

斯る國家を擁護し得るとは、光榮之に過ぎたるはなし。この覺悟よりして欣然として國事に斃るゝを樂む事となるのであります。

夫れ程國家は大切であるが、日本に於ては國家的結合の中心は御皇室である。若日本の國家にして御皇室がないならば、日本國民の勇氣は皆衰へて仕舞ふのである。國家があればどうしても其統一を計らねばならぬが、或は人民が集つて統一を決議したり、或は法律によつて規定しても到底充分な統一が出來ない。法律は其の時其の時に從つて變化するものである。日本は政體が變り、

世態が變遷しても、嚴然として變らざる萬世一系の御皇統を戴いて居るのが國家の生命である。故に日本の國家を擁護するには御皇室に忠義を盡す事より大切なるはないのであります。例へば人間の身體の中心は生命であり、肉體を健全にするのは生命を大切に思ふからであり、生命を保護する爲には場合によつては手や足の一本位は切つて捨てゝも可なりである。御皇室の爲には國民は犧牲となるべきである。斯くして最後の最後迄も擁護し奉らねばならない。風船に乘つて海を横斷する時、もし海上に於て瓦斯が漏洩し、風船が段々下降して將に水中に墜落せんとするならば重量を減ずるために色々の物を投棄するであらう。着物も、金時計も、最後には生命と取り換へる位ならば何物でも切つて捨てるであらう。恰も斯の如く國家を擁護するため、其の中心生命であらせらるゝ御皇室を奉戴するためには、凡ての金錢財寶も、個人の生命をも犧牲として、永遠に之を擁護し奉らねばならない。此のことは日本人全體、即ちお婆ア樣もお爺イ樣も、若い娘も、小さい子供も、全部が心得置くべきである。日本人にしてこの第一

の心得を知らざる者、例へば、船に乗り込んで船底に穴をあける樣な危險なるものは、速に海中に蹴込むべきと同じ譯柄である。近來斯る不心得のものが少々出來て居るのである。

御皇室を中心として之を擁護し奉ることが忠義であり、此の忠義の一つが一切の道德、一切の善行の總計となるのである。而してかゝる最高善の仕事を擔任せるは軍人であります。諸君は國民最高の善を實行すべく神聖なる任務を引受けて居らるゝのである。古歌に、

人は武士柱は檜魚は鯛
小袖は紅梅花はみよし野

とあります。綺麗な物ばかりを集めたのであります。柱には松杉等色々あるが、檜舞臺などと申して本當の建築には檜を用ゐる。柱の中では檜が一番である。魚の中には鳥賊の樣な變挺な泳ぎ方をする奴もあり、鰈の樣な可笑しげな格好の奴もあり、或は鰻の樣な奴、河豚の樣な奴もありますが、どうしても鯛が堂々として泳いで居る姿は實に立派であります。教育家や政治家は鰈や鰯の

如くであり、我輩等宗教家も鱸位の所であるが、諸君軍人は魚の中では鯛であります。先年松島に遊びましたが、岩の間に鯛が澤山泳いで居る。一疋四十錢で釣らせまするが、鯛の中でも小さい奴は卑しいから、遠方からでも飛んで來て直ぐ釣にかゝるが、大きな奴は堂々として、我不關焉と云ふ態度で泳いで居ます。然し腐つても鯛といふから軍人の名譽は眞に尊いものであります。小袖は紅梅と云ふのは、此の歌は元祿時代に詠んだのであります るが、あの頃には着物は紅梅が美しいとしたのである。諸君の職務はホチャ〳〵した若い別嬪が紅梅の小袖を着て歩いて居る如き美しい職分である。又花は御吉野の櫻が日本一であります。自分は此の春も往つて來ましたが、滿山是れ花と云ふべく、雲か霞かとまがふばかり、一目千本といつて一目に千本以上の櫻を見渡す所が、下千本、中千本、上千本、奥千本と幾つもあります。そうして其の間には後醍醐天皇の御陵もあり、楠正行が歸らじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞ留むるとの歌を、鏃を以て記し留めた如意輪堂の扉も殘つて居り、其他至る處に南朝忠臣の遺

蹟が花の間に點在して居る。實に美しいものでありまするが、花は御吉野とは之を云ふたのである。されば斯の如く御集りになつて居る軍人諸君は之が下千本であり、弘前には中千本、仙臺にも東京にも一目千本が至る處にあります。人は武士柱は檜魚は鯛小袖は紅梅花はみよし野とは能く讀んだものであります。而して武士の光榮は忠義の一つによつて得らるゝのである。故に忠義の心は又名譽の心となつて軍人の本領を汚さゞるを專一に心掛くるに至り、人は武士なりとの精神を以て軍人の面目を重んずべきであります。

更に忠義の精神、名譽の心、軍人の面目と云ふ事の上に、日本軍隊には一種の感激性があります。面倒な理屈などを考へず、直感的に眞の誠心が現れて來る。此の感激性あるが故に斃れて而して後己むの覺悟が出て來るのである。例へば炭酸曹達に酒石酸を加ふれば沸騰するっ忠義の心と、之に感激性の酒石酸が加はることによりて、そこに生命を君國に捧ぐる軍人精神が活躍して來るのであります。

感激性とは楠正成が　後醍醐天皇に召し出されて、北條討伐の大命を承はつた。正成は此の大命を拜して涙潸然として下つた。『勝敗は戰の常に候へば豫め申し難し、正成未だ死せずと聞し召れ候はゞ、聖運遂に開かせ給ふべし、叡慮を安じさせ給へ』と奉答致しました。一語百諾の奉答であつて、この中から忠勇義烈の活動も、千歳不磨の名譽も出て來たのである。而して僅に八百の軍勢を以て百萬と號せし北條の大軍を引受け、遂に建武の大業を成就せられたのであります。正成が感激したやうの精神が諸

君にも必ず存して居ると信ずる。諸君は御勅諭に於て　陛下から『汝等を股肱と頼み』と仰せられて居る。股肱とは實に容易ならぬ事であります。政治家には一國の大臣になつてもかゝる優渥なる御言葉は下らない、教育家にも、實業家にも、宗教家にも下し給はらないのであるが、軍人諸君は一兵卒に至る迄　陛下から有難い御言葉が降つて居るのである。

朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰ぎて

とは恐れ多い事であります。軍人は　陛下の御身體であると云ふ

聖旨である。斯る光榮は決して他にはありません、楠正成に賜つた御勅命と同じことであります。而も正成はあれ程の感激と、及びあれ程の大業をなし遂げたのである。然らば汝等を股肱と頼むとの仰せを拜して居る諸君は、そこに正成と同じ感激精神を有せらるべきである。名もなきものが軍人になつても　至尊陛下より股肱と頼むとの御言葉を賜はる已上は、發憤興起して誠に有難い事であると感激せねばならない。日蓮上人は法華經を御覽になつて、法華經は全く日蓮の爲めに説かれたと感激して彼が如き活

動をしました。軍人に賜つた御勅諭は　陛下が諸君の一人々々に降されしものと心得て、そこに感激の精神を喚起すべきであります。この感激性沸騰性を有して忠義の實行を貴むが日本軍人の本分であります。

聖日蓮は佐渡に流されて寒さと飢とに惱されましたが、然し國のため道の爲に流罪せられしは光榮身に餘るものと感じ、或る時眠つて居る間に雪が簑の上に積んであつた。日蓮は佛陀が清き雪の衣を以て覆はせ給ふたと感激して居られる。今日の理屈から云

へば彼れ狂へりと云ふかも知れないが、日蓮上人は法華經の行者をば衣を以て覆はせ給ふとは懇ろなる事である、忝げないと涙をこぼしたのであります。茲が日本人の尊き所以である。諸君も滿洲の野にあつて降り積む雪に逢ふても、之が　陛下より送られし賜物であるとまで感激して元氣旺盛ならんことを望むのである。又菅原道眞卿が筑紫に流されし時詠じた詩を見ると、そこに感激精神が現れて居る。罪なくして配所の月を見るのであるから、怨みこそあれ感激するとは理性に反いて居ると考ふるものもあらうが、道眞卿は

思賜御衣今在レ此　奉侍日々拜ニ餘香一

と云はれて居る。之が眞の日本人である。諸君の祖先たる日蓮上人も降り積む雪に對して感激し、道眞卿も配所に在つて感激して居る。斯る感激性が忠節の心に加つて來ると、そこに斃れて而して後已むの活動となるのであります。

忠義の精神があらふる道德を統括せる最高善である事は、既に申述べたれば御了解になつた事と考へる。名もなき者であつても

忠義のため生命を犧牲として君國に捧ぐれば、光榮之に過ぎたるはない。日蓮上人が道のために云はれた言葉を移して國家に應用すれば、

玉泉に入りぬる木は瑠璃となる。

玉泉は支那の靈水である。松杉等が流れて來て玉泉に入ると瑠璃の玉と變ると云ふことであります。名もなきもの、生命は松杉に等しい、されど之を君國のため犧牲とすれば、變じて瑠璃の玉となるのである。又

一華を五淨によせぬれば刼火にも萎まず。

一華を法華に投ずれば法界皆蓮なり。

一の華を自然に任せて置けば、一日二日に萎みてしまつて捨てらるゝが、之を法華經に奉れば法界皆蓮である。斯の如く國家の爲に生命を捧ぐるはつまらなく死ぬのではない。一人の生命を國家に捧ぐれば、一村其の義に感じて悉く忠義の志を抱き、一國其の風に化せられて世界無比の國民性が發揮せらるのである。一人の生命を國家に投ずれば日本國中悉く忠義の心が起つて來

るのであります。斯る大なる關係を有するのが軍人の名譽と云ふ事であり、一命を君國に捧げて永久滅びざる不朽の名譽を擔ふのである。

更に名譽の觀念を超越して一種の宗教的信仰を加ふれば一層美しくなるのである。即ち人の生命は不滅である。久遠の生命と云ふことを信ずるのであります。國家のため死するのが最後であつて消滅すると考ふれば、どしても多少の未練を免れない。然るに人の肉體は死んでも生命は決して滅ぶるものでないと云ふ事は、

東西古今の文明に於て明かになつて居る。人の魂が死んで消ゆると云ふ樣な事を考へて居るのは舊い思想である。唯物的思想は西洋に於ても二百年以前に亡び去りしものである。日本に於ては建國の初めより今日に至るまで、皇祖皇宗の神明は嚴然として在ます事を信じて居る。近き例を擧ぐれば、明治天皇は昨年の今月崩御遊されたが、あれ程立派な御聖德を御持ちになり、御一代の間に古今無比の幾多の偉業を完成し、又尊き敎訓を御殘しになつた。あの尊き明治天皇が、一度息を御引き取りになると同時

に、全く消えて仕舞はれたと云ふ樣な事を、日本人として考へられまするか、どうです。乃木將軍の如く

現し世を神去りまし、大君の
御跡したふて我はゆくなり。

現し世を神去りませしと雖も、明治天皇の尊靈は決して消えず、何處迄もと御伴したのであります。斯る事を純粹に感ずるのが日本人である。日本人が西洋の皮相な唯物的思想に心を奪はれて、人の魂が死ねば消ゆると云ふ樣な事を考へて居るのは、日本の御國體を知らざるの結果である。天に在ます皇祖皇宗の神靈は嚴然として我國を照らし給ふと信ずるのが日本人であります。儒教が日本に傳來した時、神を祀るのに『在ますが如し』と云ふ言葉があつた。『如し』とは宜しくないと云ふので、聖德太子が『如し』を削らせて『在ます』と改められたと云ふことである。此の事は宗教上の議論でない。日本の國體の上に確立せる事であります。聖者哲人の教には皆一徹に、人が死ねば消えて仕舞ふと云ふ事にすればそれから一切の

惡事が現れて來ると云つて居る。幸德秋水が大逆事件を企つるに至つたのも、彼は無神無靈魂論の著者中江兆民の門弟であり、其の影響を受けて居るので、無神無靈魂の思想が一切の禍の根源である。日本には古來祖先崇拜の美風があります。家には祖先の靈が之を守り給ふとの信念が家族制度の生命となつて居るのである。兎に角に　明治天皇が御崩御と同時に消えて仕舞はれたと考ふるは、殘忍性より來る思想である。女房が死んだ場合に、其の日から消えて仕舞つた、後は何をしても構はないと云ふやうな、

そんな事が人間の道として考へらるゝものでない。彼の中江兆民は其の最期に大變もがき苦んだ。河野廣中氏夫人が氣の毒に思つて雲照律師をつれて往つた。所が兆民は肝癪を起して律師にトッコを投げ付けたそうである。そう云ふ事をする人に立派な品格は認められない。どうしても人は生命の不滅を信ずべきであります

露國人は國家觀念は薄かつたが不滅の希望を有して、あれだけの働きを示したのである。マカロフ將軍は、予に水雷艇一隻を與ふれば敵艦隊をして枕を高うして安眠せしめない、と云つた程の

豪い人であるが、其の最期に祖國に向つて訣別した言葉がある。

彼は先づ祖國に向つて

マカロフは皇帝の爲めに能ふ限り戰へり、今は數分の後に艦は沈没を免れない、これにて祖國に盡す任務は終れり。

と云ひ、夫れから天に在ます神に向つて

マカロフは祖國の爲に戰ひたり、今は數分の後天に昇らん。神よ惠ませ給へ。

と云ふやうの意味の袂別をして、心靜かに神に祈り、泰然として艦と共に沈んだのである。そこです、命終れば直に滅びざる生命に向つて進むと云ふ事を信ずる、そこが尊いのである。激烈なり戰鬪が終つて傷いて野戰病院に收容せられ居ると假定せよ、一時昂奮せし精神は其の反動に銷沈の極に達し、傷の痛みに終夜眠られず、そこで故郷に殘せし妻や子の事を考へるならば、雜然たる妄想は相次で起つて來るであらう。かゝる場合に尊い信仰を有し、不滅の生命を信ずるならば、希望の光に滿たされて平和滿足の精神を持し得るのであります。故に從來の國家觀念に加ふるた

不滅の精神を以てする事は、極めて大切の事であると信ずる。

加藤清正は軍人の模範人物であると信ずるが、彼は忠義の觀念と併せて宗教の不滅の精神を持つて居つたのであります。彼は法華經の信者であり、又立派な軍人でありましたが、忠義の爲め君國に盡して死んだならば、直ぐ釋迦佛に救はれて寂光淨土へ行かれると云ふ事を、部下の軍人に敎へて居つたのであります。

我日本の軍人は義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しとの覺悟を鍛ひ上げ、有事の日欣然として起ち國事に斃るゝを樂ひやうに至らねばならぬ。又實戰の光景は平時に示すことは出來ぬ、精神修養によりて斃而後己の本分を練り、忠義は一切道德の中に最高であり、又諸德を包容せるを知り、死に對する安心を養ひ更に軍人の名譽を尙び、人は武士の體面を重んじ、之に感激性を加へ、玉泉に入りぬる木は瑠璃となるとの意味を喜び、進んで不滅の生命を信じ、忠死の後には我心靈は天にも淨土にも生れ、名譽は千歲に傳はるを思ふて、みよし野の千本櫻のやうに芳香を放ち、國民元氣の中軸となられん事を切望する次第であります。

（國友日斌筆記）

274
537

大正二年十一月十八日印刷
大正二年十一月廿二日發行

定價一部金三錢

發行兼編輯者　受知縣豐橋市清水三拾九番地　國友日斌

印刷者　愛知縣豐橋市紺屋四拾八番戸　久野利二

印刷所　愛知縣豐橋市紺屋四拾八番戸　參陽印刷合資會社

發行所　愛知縣豐橋市清水三拾九番地　天晴會豐橋支部

不許復製

終